

## 緒言

奥田 太郎

南山大学社会倫理研究所は、1980年に南山経済倫理研究所として設立され、本年度で設立40周年を迎えた。また、本誌『社会と倫理』も、前身である『社会倫理研究』が1992年に刊行されてから今号で35号を数えるに至った。前回、30周年の折に本誌25号で社会倫理研究所の歩みを振り返ってから早十年が経過し、その間も様々な研究所活動が展開されてきた。40年にわたる研究所活動の詳細については、既刊の40周年記念刊行物『Nanzan University Institute for Social Ethics 40th Anniversary Booklet』に委ね、ここでは改めてその軌跡を振り返ることはせず、専ら本誌に関連して社会倫理研究所40年の歩みを述べることにしたい。

40年を振り返ったとき、社会倫理研究所の特徴としてまず取り上げることができるのは、何より、活動における日常的学際性だと言ってよいだろう。研究所の歴代コアスタッフの専門領域をいくつか挙げてみれば、法哲学、歴史学、倫理学、国際政治学、環境経済学、行政学、国際法学など多様であり、同時期に研究所を運営するコアスタッフの専門領域が全員異なっている状態が通常の状態であり続けてきた。さらに、核となる専任のスタッフ数がきわめて少ないという事情も相俟って、専門領域が異なるコアスタッフ同士が日常的にそれぞれの専門知を持ち寄って研究所活動の方向性を決めていくというスタイルが確立されていき、今やそれが社会倫理研究所の活動のスタンダードとなっている。こうした環境下で「社会倫理」なるものを共通の探求対象として掲げるには、当然ながら、特定の専門領域の作法に則ってあらかじめ定義づけてから始めるというわけにはいかない。このような事情により、本誌に掲載される論文が取り扱う「社会倫理」はきわめて広い意味でのものとなってきた。その一方で、専門領域を異にするコアスタッフを一つの研究所に結びつけてきたのはやはり、「社会倫理」という探求対象であったことは間違いない。

さて、社会倫理研究所は、設立当初より、海外の関連諸機関や研究者たちとの連携を積極的に模索し続けてきたが、その一方で、日本語での発信にもこだわってきた。共同研究の成果などをより多くの人々に届けるためには、現時点で国際的な共通語とみなされている英語によって発信することは不可欠であり、研究所としてなすべき重要なミッションでもある。他方で、学術研究、とりわけ、人文学・社会科学に関する知的リソースを日本語で供給することができ

ることは、ポスト・コロニアニズムの状況を引き合いに出すまでもなく、世界的に見て、それ自体がきわめて貴重かつ重要なことである。本誌に関して言えば、日本語で考え日本語で書かれた質の高い学術論文を届けるということをこれまでずっと意識的に行なってきた。本誌に欧文タイトルや欧文アブストラクトをあえて付していないのも、そうした狙いの一環である。また、本誌の発信先は、正確に言えば、「日本人」や「日本国民」ではなく、日本語話者の共同体に他ならず、本誌に掲載されたすべての論文は、現在および未来の（国籍やルーツなどが必ずしも同じではない）無数の日本語話者たちに向けて書かれている。これまで、こうしたスタンスで本誌を刊行し続けてきたわけだが、「社会倫理」をことさら看板に掲げて日本語で論文を世に送り出している研究拠点は、管見の限り、当研究所の他には見当たらないため、本誌に掲載された数々の論文や書評のすべてによって、日本における「社会倫理」研究の内実が緩やかに構成されてきたし、これからも構成され続けていくのだと言ってもよからう。

最後に、「社会倫理」を語るうえで欠かせない一人の人物について言及しておきたい。40年の歴史の後半、21世紀に入ってから社会倫理研究所の探究の支柱を提供したのは、今は亡きマイケル・シーゲル氏であった。シーゲル氏は、英国バーミンガムで修めた神学の専門知にとどまらず、その探究射程は実に広く、歴史記憶の問題、平和と紛争の問題、地球環境の問題、産業と経済の問題などに及び、さらに、アカデミックなリソースのみならず実務者や現場の人々の経験をもリソースとして、様々なスタイルで自らの学術的見解を示し続けてきた。シーゲル氏のそうした知的取り組みは、一言で言えば、様々なレベルでの「和解」を目指して行われており、そうした取り組みの軌跡が、「レジリエンスと補完性原理」という、社会倫理研究所が現在掲げている中期的なテーマに結実している。このように、一言では言い表しがたい多面的なシーゲル氏の学術的探究がいかなる専門領域に属すると言つてよいのかは悩ましいのだが、シーゲル氏自身は自らの探究の領域を「和解学」あるいは「社会倫理」と称していた。ここで重要なのは、シーゲル氏は自らの専門領域を「社会倫理学」ではなく「社会倫理」としていた点である。現場における実践知と学術的思考のどちらも常に疎かにしなかったシーゲル氏の知的構えゆえに、探究対象としての「社会倫理」に牽引されて成り立つ幅広い専門領域としてその名が選ばれたのであろう。本誌を「社会倫理」の学術雑誌だと標榜する際には、こうしたシーゲル氏の遺した知的活動の足跡が裏側でイメージされている。

設立40周年を記念する本号の特集テーマは「社会倫理の可能性」である。収録された論考はすべて、現在社会倫理研究所にスタッフとして関わっている研究者の手によるものである。目次から一目瞭然だが、扱われているトピックは実に幅広い。一見、記念号のために寄せ集められたバラバラの論考群でしかないように見えるかもしれないが、ここまで述べた社会倫理研究所の活動と本誌『社会と倫理』の歩みを念頭に置いていただければ、それらが間違いなく「社会倫理」の論考であり、このまとまりそのものが今後の「社会倫理」の可能性を照らし出していることがわかるだろう。今後10年間で「社会倫理」の探究がいかなる展開を見せるのか、その予感のもとで、本特集を味わっていただきたい。